No.48 September 2011

▲ ▲ ▲ 京都大学 農学研究科／農学部国際交流室 ▲ ▲ ▲

News Letter

International Exchange Section in Agriculture http://www.fsao.kais.kyoto-u.ac.jp/

二粒の麦

田　中　　樹

［地球環境学堂准教授
農学研究科兼任］

2011年9月末日を以って京都大学を離れ、総合地球環境学研究所に移ることになりました。大学院時代から数えて京都大学に20余年間もお世話になったことを思い起こすと感慨深いものがあります。まだ、自分を振り返る年齢ではありませんが、中締めをするという意味で、これまでの経験や思いなどを記したいと思います。

私と京都大学との「出会い」は、1984年に遡ります。ケニアにある農工大学で土壌肥料学の講師をしていた時です。後に恩師となる久馬一剛先生の調査隊が任地を訪問されました。雨の中、傘もささずに熱く土壌の説明をしてくださいました。当時の私は、土壌学が自身の専門であるという強い自覚もなく、能天気にも「何だか映画に出てくる高倉健さんのような雰囲気だなあ」と思っていました。でも、このような出会いは、私のような能天気な人間にもじわりと効いてくるのですね。アフリカ全域を襲った1985年の大干ばつを横目で見ながら、土壌学や農学が人々の暮らしにどう役立てることができるかを考えるようになりました。混然とした輪郭のない思いを行き来しつつも、将来、国連（特にFAOやUNEP）の国際協力フィールド専門家を目指そうと思い、1987年に農学研究科の土壌学研究室に入りました。

大学院では「土壌クラスト」を研究しました。土壌学に関する学位研究の傍ら、広領域の研究（一般農学、境界農学と呼べるのかも知れません）にも手を出して、「インドの在来農耕技術の研究」を始めました。普通は、専門研究に専念しないことを叱られても不思議ではないのですが、久馬先生は、むしろ「農業(農学ではなく)を一番よく知る先生は、悔しいが農学研究科にはいない、文学部地理学の先生を紹介しよう」と言ってくださいました。応地利明先生との出会いです（後年、文学部から東南アジア研究センターに移られます）。アポなしで研究室を伺った私にたっぷりのインド農耕論を講義してくださいました。インドのデカン高原の村を紹介され、民家に寄宿しながら4ヶ月間フィールド調査をするという経験をしました。毎日、もっぱら歩測により農耕地の境界を記録し、作物や管理作業を観察していました。調査よりは、牛耕作業を手伝っている時間の方が長かったかも知れません。私の世代で牛耕作業ができる研究者はいるかな、などと今でもひそかに小鼻を膨らませたりしています。データ取りよりは暮らしの体験や感性に触れることを意識したこの経験が私の専門の骨格となっています。

インドから戻ると博士課程半年目で「助手になるか」との声がかかりました。正直、困惑しました。国際協力のフィールド専門家への道はどうなる。でも、インド帰りの私は、「これもカルマかなあ」と考え、今の道に進みました。その後、応地先生からのお誘いでインドと西アフリカ・サヘル地域の在来農耕とその水平技術移転の可能性をテーマとする国際学術研究に参加しました。インドとアフリカの両地域を視野に納めるスケールの大きさと着眼点の斬新さに触れるとともに、丁寧に村落調査を行なう姿勢の大切さを学びました。さらにその後、アフリカ在来農耕論の講読会に参加したことがきっかけで、アフリカ地域研究センターによるタンザニアでの在来農耕研究が始まります。ここでは、掛谷誠先生と出会います。人類学者である掛谷先生からは、タンザニアの村落調査で「人々とその暮らし」に焦点をあてる研究の大切さを教わりました。この研究は、村落開発支援に向けた「在来性を軸とする住民参加型アプローチ」に関するフィールド実証的な事業へと展開しました。

京都大学の風土の一つに、学生や若手が自由に教員を訪問して学びを深めるというのがあります（フィールド系の領域だけかも知れませんが）。私は、上述の3名の先生に出会い、研究の醍醐味を堪能しつつ、それなりに自らの研究の中心課題や輪郭を見つけることができたと思います。専門性の細分化が進み、農学研究や教育から「人々の暮らしや生業」、「生きることへの思索」、「社会の未来像」を語り学ぶ環境が少なくなりつつあるのを感じています。この風土が、農学研究科で生き生きと継承されることを願ってやみません。

1999年に比較農業論分野に異動しました。当時、比較農業論分野には、大学院生定員も実験室もありませんでした（その後、院生定員が割り当てられ、また耐震工事に伴う本館への移転で実験室が整備されました）。私や同僚に課せられた業務の一つが、「科学英語」の講義です。結構まじめに取り組んだものの、農学部の学生の潜在能力を伸ばすのに英語教育を専門としない教員を充てて良いのか、との違和感を拭えませんでした。当時の研究科長と何度かやり取りをして、現行のように、ネイティブの先生を非常勤講師とする「科学英語」教育を実現しました。この取り組みは、京都大学のなかでも先駆的なものだといえます。その後、講師の先生方の提案で学部3回生～4回生、大学院生を対象とする英語学習の仕組みを整えることを試みましたが、実現に至っていないのは残念です。農学研究科は個々の専攻や分野のレベルで高い学術的成果を上げ社会評価も受けています。その一方で、農学研究科として、教育研究成果の発信、農学教育の国際化、未来社会への原石ともいえる学生の資質向上につながる教育環境の改善、分野横断型の研究プロジェクトや社会貢献活動の展開、などに貢献できる潜在性とその余地を残しています。微力ながらその起点になろうと、数年前に「農学連携推進センター構想」を提案したことがあります。残念ながら教授会でボツになったようです。今後、分野や専攻の枠組みを超えて、わが国やアジア・アフリカの『未来農

学』を構想し実践する動きがでてくることを祈ります。挑戦を続ける組織であって欲しいのです。自らを変革することをせず、長いまどろみのなかでいずれ朽ちてゆく「陽だまりの樹」にならないと誰が言えるでしょうか。

2002年から地球環境学堂にレンタル移籍しました。京都大学の中に地球環境学の研究と実践を行なう専門人材を育成する大学院をつくるという、今の時代にあって胸が躍るような取り組みです。農学研究科の専攻２つほどの規模ですが、この10年間で京都大学の中でも存在感のある大学院になりました。地球環境学堂では、研究よりは教育と社会貢献活動に重点をおきました。それは、大学院の理念が、地球社会や地域社会が直面する今日的な問題を解決する次世代人材の養成を謳っているからです。また、これからの農学や地球環境学が目指すべきことの一つは、「人々の暮らしの安全や幸福」を考えることだと思うためです。もっと突き詰めれば、「平和学」かも知れません。教育と社会貢献に傾倒したのは、限られた専門分野の研究者を育成する従来の大学院教育に疑問を感じたためでもあります。京都大学に入ってくる学生や院生は素晴らしく優秀です。一方で、私たちは、彼らの進路希望や社会ニーズを的確に捉えるような人材育成の仕組みや環境を整えてきたと言い切れるでしょうか。研究者養成は十分に実績がありますが、研究以外の道に進む者たち（卒業者の9割以上が該当します）への教育はどうでしょうか。同僚らと取り組んだのは、ベトナム中部での海外拠点の形成と展開（アジアプラットフォーム事業）です。そこでは、現地のフエ大学とともにJICA草の根事業（社会貢献）・科研費による国際共同研究・JSTの環境リーダー育成事業（教育）・学部生向け海外研修（教育）などが行なわれ、もう一押しすると「京都大学インドシナキャンパス」が作れるのではという段階まで進んでいます。今後、農学研究科からの積極的な参加を期待します。農学徒の真骨頂は「フロンティアを目指すこと」ですよね？

最後になりますが、この記事の表題を「二粒の麦」とした理由を書きましょう。ヨハネによる福音書の第12章24節に「一粒の麦、もし地に落ちて死なずばただ一つにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし」という言葉があります。私の心の中には「一粒の麦」ではなく「二粒の麦」があります。一つは私自身の、もう一つは、南米で夢半ばにしてテロリストの凶弾に倒れた友人のものです。それは、私が土壌学分野の助手になった翌年の1991年に起こりました。友人とはアフリカなど熱帯圏諸国の地域開発支援や貧困解消などの夢を共有していました。私は、一度は、土壌学者（あるいは農学者）になる決心をしましたが、以来、別の道を模索するようになりました。土壌学分野や比較農業分野、地球環境学堂での20余年の日々は、その模索の道のりでもありました。心の中にある「二つの麦」はたっぷりと水を吸いました。私の選んだ麦は、総合地球環境学研究所でのプロジェクト『砂漠化をめぐる風と人と土』を通じて、アフリカ半乾燥地での砂漠化と貧困問題の解決に取り組むというものです。麦が健全に育つためには、これから多くの人々に踏んでもらわなければなりません。小生意気で青臭さが抜けない自分ですが、これからも叱咤激励を頂ければ幸いです。

交流の歩み（48）

“A Memorable Time in Kyoto”

Roderick Drew
Guest Professor
Agronomy and Horticultural Science
October 2010－December 2010
(Griffithe University, Australia)

On invitation from the Faculty of Agriculture, I worked at Kyoto University as a visiting Professor for 3 months. Firstly, I would like to thank the Faculty of Agriculture for the opportunity to come as a visiting Professor to Kyoto University. It has been a very rewarding experience and has led to important collaboration in both research and other mutual areas of interest. I would also like to thank Kirie Watanabe and other staff at the international office for all the help they have given me, both before I came to Kyoto and during the time I was here.

Autumn is an enjoyable time of year in most parts of the world but I doubt that there is anywhere more beautiful than Kyoto. After a particularly long hot summer this year, the trees throughout the city and over the mountainsides have responded with a grand display of autumn leaves. My family and I live in Brisbane, Australia, which is subtropical and the trees are evergreen. It has been a great pleasure and privilege to be here to witness the ‘momiji’. We particularly enjoyed our trip in the cable car up Mount Hiei through the trees in autumn colours and the magnificent views over Lake Biwa from the summit.

We enjoyed sampling the various foods that are available

◆外国人客員教授◆

2011年10月～2012年3月

氏　　名：**Tsunemi YAMASHITA**
国　　籍：アメリカ合衆国
招聘期間：2011年8月15日 ～ 2011年12月15日
所属・職：アーカンソー工科大学准教授
研究題目：サソリ毒素遺伝子のクローニングと微生物による毒素の大量発現
受入教員：応用生命科学専攻･生物調節化学分野･中川 好秋 准教授

氏　　名：**Malcolm FITZ-EARLE**
国　　籍：カナダ
招聘期間：2011年9月22日 ～ 2011年12月21日
所属・職：キャピラノ大学名誉教授
研究題目：英語による科学論文の作成技術に関する研究
受入教員：比較農業論講座･平井 伸博 教授

氏　　名：**Hugh John BARCLAY**
国　　籍：カナダ
招聘期間：2011年10月1日 ～ 2012年3月31日
所属・職：太平洋地区森林研究所アドバイザー
研究題目：ナラ枯れ防除のための複合防除法の検討
受入教員：地域環境科学専攻･微生物環境制御学分野･二井 一禎 教授

氏　　名：**Irina TIKHOTSKAYA**
国　　籍：ロシア
招聘期間：2012年1月10日 ～ 2012年7月10日
所属・職：モスクワ国立大学准教授
研究題目：一次産業における資源循環活動と持続的発展
受入教員：生物資源経済学専攻･地域環境経済学分野･加賀爪 優 教授

氏　　名：**Josse Guillaume DE BAERDEMAEKER**
国　　籍：ベルギー
招聘期間：2012年3月1日 ～ 2012年11月30日
所属・職：ルーベンカトリック大学教授
研究題目：農産物の光学的品質計測に関する研究
受入教員：地域環境科学専攻･農産加工学分野･近藤 直 教授

in Kyoto. Most Japanese foods were quite unfamiliar to us so we tried very hard to sample something different each day. It was not difficult for us to learn to enjoy rice and soy sauce, yakisoba, gyoza, miso soup, tempura, sukiyaki and udon, but we did have some difficulty with tako and raw meats. One of the highlights was the special meal of tofu prepared in a variety of different ways that we shared with Professor Yonemori and his wife in a Japanese restaurant in Arashiyama.

Kyoto is very different to Brisbane. Although the population of the two cities is similar, the land areas are quite different. Brisbane is one of the largest cities in area in the world. Most of the people rely on cars for transport, even to go to the supermarket and to take their children to school. Brisbane has very poor public transport compared to Kyoto. It has been different for us to be able to take so many different buses and trains when we visited the different parts of Kyoto.

Finally, we were amazed to see so many temples and shrines in Kyoto. We have been told that there are more than 2000, with some being world heritage listed. The ancient architecture is fascinating and very beautiful. We particularly liked Kinkakuji, Heian Jingu and Kyomizudera, but of even greater pleasure to us was the serene and stunning gardens surrounding the temples. The stone gardens of Ryoanji and Ginkakuji, and the wonderful garden at Tenryuji were particularly memorable.

We will return to Brisbane with many wonderful memories and hope to visit you again some time in the future.

Prof. Drew and family share lunch with Prof. and Mrs Yonemori (2010)
The second from the left

留学生の眼（29）

"Japan and Kyoto in my memories"

Ganesan Ponesakki
Doctoral Student, India
Applied Biosciences
October 2008−September 2011

It has been a privilege and honour to be a student of Kyoto University, one of the world class Universities and I am very fortunate to do my doctoral course in the Laboratory of Marine Bioproducts Technology under the esteemed and genuine guidance of Professor Takashi Hirata and Dr. Tatsuya Sugawara with a great sense of motivation and inspiration. I had great time in this laboratory where I not only enjoyed doing experiments but also gifted enough to have good colleagues and friends.

Japan is the first abroad country I visited; it is a very interesting country with beautiful seasons, blended well with traditional and cutting edge modern technologies. I am always impressed by the honesty, kindness, patience and helping tendency of people in Japan.

When I arrived Japan on April 2008, the life become challenging and interesting with different language, food and culture. As time goes on I get adapted and started loving the culture and food of Japan. Fresh fish (Sashimi) of Hokkaido, Kyoto sweets, and Okonomiyaki became my favourite food. I am impressed by the elegance and grace in the presentation of food in Japan. Temples, Shrines, traditional festivals and Museums became my favourite visiting spots. I enjoyed the breeze and noise of kamokawa river in spring, summer and fall seasons.

My life in Kyoto from 2008 to 2011 holds lot of beautiful memories. I am living near to the Silver pavilion (Ginkakuji) with my family. It is so refreshing to ride bicycle across the pinky sakura and colourful autumn leaves. I was impressed by the smiles and encouragements of strangers while walking on streets with my pregnant wife. My daughter Oliviya was born in Kyoto during autumn. Indeed, I am lucky to have a wonderful host family, Mr. and Mrs. Kumaki of Arashiyama town, who made Kyoto as my second home, and took every chance to introduce the traditional cultures and festivals of Kyoto.

I thank the International Exchange Section of Agriculture faculty which made my life at Kyoto more enjoyable and informative by arranging bus trips and many cultural, sports meet and tea ceremonies. I could remember those days we enjoyed the beauty of Wakayama and Tateyama. I had the opportunity to interact and make friendship with people from different countries. I express my gratitude to all Japanese language teachers who made my life in Japan easy and enjoyable.

My Lab. members (2011)
The third from the left in the back row

◆客員教授特別講演会◆

■ 2011年4月19日 **Werner Pleschberger** (University of Natural Resources and Applied Life Sciences, Vienna)
"Winter ski resorts in Austria and Japan, Are they at the edge? Two perspectives"

■ 2011年5月26日 **Method Kilasara** (Sokoine University of Agriculture)
"Challenges to Sustainable Management of Land Resources in Sub-Sahara Africa: Case Study of Tanzania"

■ 2011年6月20日 **Yun-Hwa Peggy Hsieh** (Florida State University)
"Immunodetection for Food Safety and Food Quality"

行事アラカルト

◆ 新入生ガイダンス 4月8日・歓迎パーティ 4月11日 ◆

35名の新入留学生を迎え、国際交流室でガイダンスを、北部生協「ほくと」で新入生歓迎パーティを行いました。歓迎会には新入留学生、在学留学生をはじめ教職員、客員教授など合わせて約90名の人にお越しいただきました。参加者は新入留学生を歓迎するとともに、普段はなかなか会わない他分野の先生や学生とも交流を深めました。

◆ 前期日帰り見学会 5月19日◆

宇治市にある京都府茶業研究所ならびに茶業会議所への見学会は天候にも恵まれ、おかげさまで無事終了しました。日本茶の栽培方法や製茶方法の見学はとても勉強になったことと思います。茶房で実際に味わった玉露の風味はちょっとしたカルチャーショックだったかもしれません。訪問先の方々には大変お世話になり、有難うございました。

◆サッカー大会・BBQパーティ 6月4日◆

今回は記念すべき10周年記念大会を開催することができました。参加者数は約140名、参加チーム数は9でした。グループリーグと決勝トーナメントを勝ち抜き、優勝したのは、アラブフットボールチームでした。おめでとうございます。元研究科長・松野隆一先生をはじめ多くの応援の方々、審判をして頂いた元農学研究科名誉教授・梅田幹雄先生他、運営に協力していただいたサッカー部と学生スタッフ、関係者の方々に心より感謝いたします。

◆留学生交流のためのミニバザー 6月23日、24日◆

恒例のミニバザーを国際交流室で開催しました。農学研究科や理学研究科の事務の方々にも出展、その他のご協力を頂きありがとうございました。留学生や日本人学生にも大変好評でした。収益金はすべて国際交流室の留学生交流行事のために使わせて頂きます。

◆国際交流室七夕祭り 6月29日～7月7日◆

4年ぶりに七夕祭りを開催しました。主に日本語教室のメンバーによって、折り紙や短冊などで笹に飾り付けをしました。期間中、留学生や日本人学生がオフィスを訪れ、短冊に願い事を書きました。期間後、願い事の書かれた短冊を藤森神社に納めました。

◆ 農学部国際交流ニュース ◆

農学部国際交流推進後援会の会員加入について

2011年度会員加入のお願いを7月にご案内しましたところ、9月30日現在で、学内外から104名・1団体の方にご加入いただいております。誠に有り難うございます。引き続き加入を受け付けておりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

外国人留学生の大学院入試合格者

2012年度大学院修士課程入試（8月23日～25日実施）合格:応用生物科学専攻（韓国1名）、食品生物科学専攻（タイ1名、インドネシア1名）

10月大学院入学留学生

●農学特別コース（G30）留学生（計9名）
修士課程6名:内訳 森林科学専攻（ミャンマー1名、インドネシア1名）、地域環境科学専攻（インドネシア3名、米国1名）
博士後期課程3名:内訳 地域環境科学専攻（ベトナム1名、マレーシア1名、中国1名）

●研究生（計10名）
内訳 森林科学専攻（中国1名、ミャンマー1名）、応用生物科学専攻（中国2名、デンマーク1名）、地域環境科学専攻（中国1名、韓国1名）、生物資源経済学専攻（中国1名、台湾1名）、食品生物科学専攻（韓国1名）

10月学部入学短期留学生

KUINEP留学生　資源生物科学科（タイ1名）

◆ 2011年度　後期行事予定 ◆

■ **後期新入留学生ガイダンス**
日　時：10月3日（月）16：00-17：00
場　所：国際交流室

■ **後期日帰り見学会**
日　時：11月15日(火) 9：00-18：00
訪問先：京大防災研、宇治川オープンラボラトリー、萬福寺

■ **第5回 ほっこりカフェ**
開催日未定

■ **第5回 餅つき大会**
1月 開催予定

■ **国際交流室ミニバザー**
開催日未定

発行　京都市左京区北白川追分町
京都大学 農学研究科／農学部国際交流室
電話（075）753-6320,6298　e-mail：fsao@kais.kyoto-u.ac.jp
*本News Letterのバックナンバーをホームページに掲載しています。http://www.fsao.kais.kyoto-u.ac.jp/

印刷　京都府京都市南区東九条南石田町1番地
朝陽堂印刷株式会社　電話（075）681-5331